St. Luke's International University Repository

Field Work Conceptualizing People-centered Care Targeting Senior Students: A New Attempt at Collaboration with the Local Government in the Project “Places to go for the Elderly”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 髙橋, 恵子, 佐居, 由美, 縄, 秀志, Takahashi, Keiko, Sakyo, Yumi, Nawa, Hideshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00013658

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

短　報

People-Centered Care を基盤とした学部４年生の総合実習報告
―自治体との連携による「高齢者通いの場」支援事業での新たな取り組み―

髙橋　恵子[1)]　佐居　由美[1)]　縄　秀志[1)]

Field Work Conceptualizing People-centered Care Targeting Senior Students
―A New Attempt at Collaboration with the Local Government in the Project "Places to go for the Elderly"―

Keiko TAKAHASHI[1)]　Yumi SAKYO[1)]　Hideshi NAWA[1)]

〔Abstract〕

The Chuo-ward of Tokyo Met. is providing assistance for the project "KAYOINO-BA Places to go for the Elderly" which are established in neighborhoods of the elderly within their walking distance. The key concept of this project is to promote casual communication among the elderly in an area based on their own initiatives, through which they can eliminate risks of social isolation and boost their life motivation.

The College of Nursing at St. Luke's International University, set up a field work curriculum to participate in this project by targeting senior students as a part of consolidated field works (Fundamental nursing) in 2018, Through this curriculum, students could learn Peopled-Centered Care in which local residents take initiatives for maintaining and enhancing their own health.

In this paper, we will overview our Consolidated Field Works, and report how we have prepared this particular curriculum and what the students have learned from the field work.

〔Key words〕 People-centered Care, Comprehensive Practicum, Local Government, Collaboration

〔要　旨〕

超高齢社会の課題改善に向けて，高齢者が社会的に孤立せず，生きがいをもって生活できるよう，東京都中央区では，中央区「高齢者通いの場」支援事業を行っている。「高齢者通いの場」は，高齢者が歩いて行ける身近な地域に，気軽に交流できる場をつくり，住民主体で運営する活動である。今回，聖路加国際大学看護学部では，2018年度の学部４年生対象の「総合実習（基礎看護学）」科目において，市民が主体となり，自分の健康課題に取り組む People-Centered Care の実現に向けた看護のあり方を考える目的で，学生が，その住民主体の地域づくり「通いの場」支援事業活動に，実習を通して参画するしくみを構築した。本稿では，聖路加国際大学看護学部の「総合看護（基礎看護学）」科目における概要および，自治体との連携による準備状況，実習状況，さらに学生の学びを含めて報告する。

〔キーワーズ〕 People-centered Care，総合実習，自治体，連携

１）聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science

受付　2018年10月26日　　受理　2018年11月19日

Ⅰ．はじめに

わが国は，世界で類を見ない速さで超高齢社会に突入し，これに伴う様々な健康課題が山積する。そのような中，高齢者が人生の最後まで，住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるよう，各自治体が地域の特性や実情を踏まえて，独自の体制を整備した地域包括ケアシステムの構築を推進している[1)]。東京都中央区では，超高齢社会の課題に向けた取り組みとして，高齢者が社会的に孤立せず，生きがいをもって生活できるよう，身近な地域に，気軽に交流できる住民主体の地域づくり中央区「高齢者通いの場」（以下，「高齢者通いの場」）支援事業が開かれている[2)]。今回，聖路加国際大学看護学部では，2018年度の学部４年生対象の「総合実習（基礎看護学）必修３単位」において，市民が主体となり，自分の健康課題に取り組む People-Centered Care（以下；PCC）の実現に向けた看護のあり方を考える目的で，学生が，住民主体の地域づくりの「通いの場」に，実習を通して参画するしくみを構築した。

そこで，本稿では PCC を基盤とした看護学部４年生の「総合実習（基礎看護学）」の科目における概要および，自治体との連携による準備状況，実習状況，さらに学生の学びを含めて報告する。

Ⅱ．総合実習（基礎看護）の概要

１．総合実習（基礎看護学）の目標

聖路加国際大学看護学部では，学部４年生を対象に「総合実習」の科目（３単位）を開講している。総合実習の目標は，「多職種チームの一員として，人間と環境との相互作用の理解にもとづき，看護職としての役割を主体的に発揮し，効果的に看護を実践する能力を養う。また，看護の専門性について考え，自らの看護観を深める」ことである。この総合実習は，基礎看護学，看護教育学，小児看護学，成人看護学，老年看護学，精神看護学，在宅看護学，地域看護学，国際看護学などの様々な専門領域に細分化され，学生は，これまでの学習経験を通し，さらに学びを深めたい領域を選択する。その領域の１つである基礎看護学は，総合実習（基礎看護学）において，「市民主体の健康支援活動に参与し，市民とのかかわりを通して，市民の健康ニーズを理解し，People-Centered Care を実現するための看護実践のあり方について考えること」を学習目標に挙げている。

２．People-Centered Care（PCC）とは

総合実習（基礎看護学）の学習目標に挙げている，PCC とは，看護の基盤となる概念であり「市民が主体となり，看護職を含む保健医療従事者とのパートナーシップを組み，個人や地域社会における健康問題の改善に向けた取り組み」である[3)]。PCC の特徴は，市民が常にケアの主体となり，専門職は一方的なかかわりではなく，市民を支えるパートナーとして，市民と対等な立場に立ち支援を行うことである[4)]。また PCC の成果には，パートナーである市民と定めた健康課題の目標を達成すること，また，市民のコミュニケーション力や情報を見極めていく力が向上することといった「個人の変容」を主としたもの，さらに，地域社会がもつさまざまな健康問題の改善や，新たなケア体制や組織がつくられることなどの「社会の変容」がある。本科目では，看護職を志す最終学年の４年生に向けて，実習を通してこの People-Centered Care を実現するための看護実践のあり方について考え，自らの看護観を深める学習の機会とした。

３．実習内容の検討

総合実習（基礎看護学）の内容について，2017年12月から2018年３月にかけて，本科目を担当する基礎看護学教員３名で数回にわたって繰り返し検討した。その結果，学習目標の達成に向けた実習の場の１つとして，市民の健康への気づきを促すパートナーである看護職として，市民が集う場所で，30分間の健康ミニ講座「健康への気づきプログラム」を学生が企画し，実施する実習内容が提案された。また，このプログラムの実施可能なフィールドとして，2016年度より自治体がモデル事業を実施し，2017年度から「高齢者通いの場」支援事業として活動している場を筆者らは候補として挙げた。その理由は，①住民主体の活動であり，PCC を考える場として最も適していること，②聖路加国際大学と中央区は連携協定を結んでおり，大学が教育活動を通して地域貢献する機会となること，③「高齢者通いの場」支援事業の開設発端となった高齢者孤立防止・生きがい推進懇談会[5)]の話し合いに筆者が参加しており，事業背景と活動内容が明確であったことが，挙げられる。

４．中央区「高齢者通いの場」支援事業とは

候補に挙げた中央区支援事業の「高齢者通いの場」は，東京都中央区内に住む65歳以上の高齢者が社会的に孤立せず，生きがいを持ち生活できることを目的に始まった取り組みである。高齢者が歩いて行ける身近な地域に，気軽に交流できる住民主体の地域づくりとして中央区「高齢者通いの場」という名称で2016年度よりモデル事業として始まった。この支援事業は，わが国の超高齢社会による健康課題から，人生の最後まで，住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるよう，地域包括ケアシステム[1)]の構築を国が推進し，各自治体で，その地域の特性や実情を踏まえて，独自の体制を整備し，取り組むことになった背景を持つ。中央区は，2015年度よ

り中央区職員に加え，区内で高齢者に関する事業に従事する職員，区民を代表した町内役員・民生委員，区内で活動する団体責任者，区内にある保健医療系大学の教員など，中央区の高齢者に関わる多彩なメンバーで構成された「中央区高齢者孤立防止・生きがい推進懇談会」[5]を立ち上げ，高齢者が社会的孤立せず，生きがいをもって生活できるようにするための議論の場を設けた。その結果，①身近なところで誰もが気軽に参加できる交流の場をつくる，②交流が少ない人にこちらから声をかける仕組みをつくる，③若いうちから近隣との人間関係の輪を広げていけるよう働きかける，④元気な高齢者がいきいきと支える側にまわるための支援をする，⑤行政・地域の魅力的な情報を隅々まで行き届かせる工夫をする，という５つの提言がされ，「高齢者通いの場」支援事業として開設された。現在，この「高齢者通いの場」は，月２回以上，１回あたり２時間以上決まった場所（室内）で，常時２名以上のスタッフが企画・運営の責任者となり，介護予防につながる体操や歌などのプログラムを複数取り入れている。2018年現在，「高齢者通いの場」は，中央区全域に12ヶ所（12団体）で開催されている。

５．大学と自治体との連携科目に至るまでの経緯

2018年３月に，総合実習（基礎看護学）の「高齢者通いの場」での現実可能性について，事業を支援している中央区高齢者福祉課の担当職員３名と本学科目担当の看護教員３名との話し合いの場を設けた。中央区高齢者福祉課においても，高齢者孤立防止・生きがい推進懇談会の場で議論の末，「高齢者通いの場」の取り組み事例として，大学や学生等との連携を想定していた提案もなされており，今回の大学からの学生実習との連携体制の申し出についてスムーズに交渉が成立した。その後，中央区高齢者福祉課職員の窓口担当と，大学側の科目教員の窓口担当を決め，双方の連絡・相談・調整が始まった。また，大学側は，事業の団体申請の現状等を把握するため，中央区で開催された「高齢者通いの場」の一般説明会へ参加した。

６．学生の健康ミニ講座実施までの流れ

2018年度総合実習（基礎看護学）の履修学生は，６名であった。

１）事前準備

①看護ゼミナール（基礎看護学）

総合実習（基礎看護学）履修にあたっては，総合実習に先立ち４月～６月に開講される看護ゼミナール（基礎看護学）１単位の履修することを前提条件としていた。看護ゼミナール（基礎看護学）では，総合実習で実施するプログラム作成に向けた準備学習を行った。授業内容としては，初回に「People-Centered Care」における概

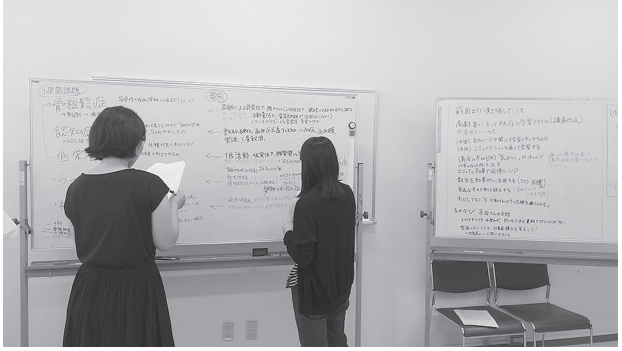

写真１　事前準備に取り組む学生の様子（看護ゼミナール）

論を再度学習し，学習目標を再確認した。次に，実習先を把握する目的で，中央区高齢者福祉課の職員による中央区の高齢者の特徴と「高齢者通いの場」の導入経緯と現状について講義を設けた。それらの情報を踏まえ，学生は「高齢者の健康課題」「中央区における高齢者の生活と健康の特徴」「市民健康講座に向けた方法」について，文献検討，個人ワーク，グループワーク，中間発表を取り入れながら，健康ミニ講座のプログラム作成を進めていった。また途中に，中央区地域包括支援センター職員による市民健康講座の実際を見学し，市民への講座を実施する際の工夫について確認する機会も設けた。

②総合実習（基礎看護学）

総合実習は６月から７月の期間に開講された。実習が開始した６月から，学生は看護ゼミナールで準備したプログラム内容をもとに，実際に健康ミニ講座として実施できるように，講座の概要（目的，目標，内容，実施の留意点，評価方法），展開案を作成した。講座前に，２回の学内予行演習を実施し，何度も修正を重ね内容を精錬した。具体的な方法は，６名の学生が，２名１組の計３グループに分かれて進めた。学生は，自分たちが実施する「高齢者通いの場」で，参加者の特徴を把握し，プログラムを準備した。学生が実施するフィールドの候補選定は，中央区高齢者福祉課の職員が行った。選定された３ヶ所の「高齢者通いの場」（ふらっとルーム新川，日本橋サロン，月島交流カフェ）は，2016年度のモデル事業から開始されており，開設後３年目を迎えていた。フィールド先とのその後の連絡や交渉は，中央区職員が仲介に入っていただき進めていった。学生は，講座を実施する約１ヶ月前に，見学を兼ねて「高齢者通いの場」に参加し，参加者の背景や特徴，おおよその健康ニーズを確認し，講座のテーマを絞り込み，実施当日まで準備を進めた（**写真１**）。

２）「健康への気づきプログラム」講座の実施

表１に示すように，学生は７月上旬に，「高齢者通いの場」の実施時間（２時間）のうち，30分間枠をいただき各テーマで講座を実施した。今回は，３グループとも，外出頻度が低下することで生じる高齢者の筋力低下，人

表１　総合実習（基礎看護学）でのミニ講座のテーマ

高齢者通いの場 講座実施日	講座のテーマ	学生
ふらっとルーム新川 〈７月４日〉	教えてください！ 新川ってこんなとこ！	２名
日本橋サロン 〈７月６日〉	健康的な自分らしい過ごし方	２名
月島交流カフェ 〈７月10日〉	皆でつくろう，月島街歩きマップ	２名

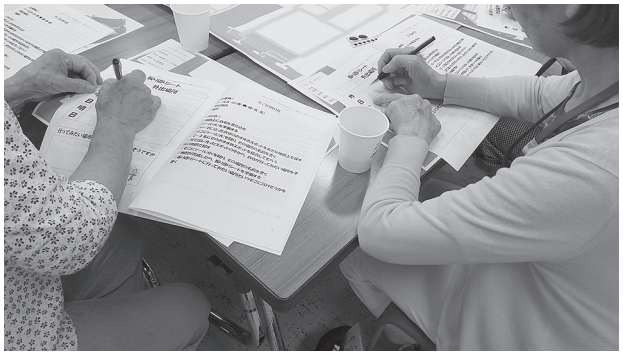

写真３　講座のワークに取り組む参加者の様子

とのつながりの減少による健康問題に焦点をあてたプログラムであった。学生は，参加者に居住地域周辺で楽しく活用できる場が様々あることに気づいてもらい，社会的孤立の予防を行うことを目的に企画した。プログラム目標には，参加者が，①自分の外出頻度に気づくこと，②外出することで介護予防や人とのつながりが維持できることに気づくこと，③健康づくりに役立つ施設を知ることができること，④どのような一日の生活が健康的な生活であるかを考えることができること，を挙げた。それぞれグループは**表１**に示すように，「健康的な自分らしい過ごし方」等の講座にテーマをつけて実施した。講座の進め方については，各「高齢者通いの場」の特徴に合わせ，グループによって多少の違いはあったが，冒頭に外出することの意義を説明し，次に，自分の外出頻度を冊子に書き出してみるワークを取り入れていた。自分の外出頻度を確認後，参加者と居住地域を示した「お出かけマップ」を用いて，自分が外出する場所や行ってみたい場所や施設をシールで貼っていくよう進め，参加者同士で新たな健康づくりにつながる場所や施設をみつける内容となっていた。

参加者は，日常的に自分が外出する場所について，楽しそうに隣の人たちと話しながら進めていた。しかし，参加者の理解度や作業の進行に差があり，学生が想定していたよりも多くの時間がとられ，30分間以内に講座が終了せず，延長や内容変更を余儀なくされた学生グループもあった。しかし，参加者からは「歩くことの大切さを教わった」「いろいろな場所に出かけ，人と交わることの大切さを教わった」といった，外出や人とのかかわりの意義についての学びに関するコメントや，「毎日同じ活動の繰り返しだったことに気づいた」などの自分の外出・活動のパターンに気づく機会になった等のコメントも聞かれた。参加者が新たに健康づくりに役立つ施設を知ることができるという目標については，参加者のほとんどが居住地域の施設や場は既に熟知しており，新たな情報を提供できなかった。しかし，一部の参加者からは「知らない場所を知れた」とのコメントも聞かれた。また，「もっと歩こうと思った」「わかりやすかった」「全体的に楽しめた」などの講座へのポジティブなコメントが聞かれた（**表１**）（**写真２～４**）。

写真２　学生が健康ミニ講座の実施をしている様子

写真４　学生が準備した「お出かけマップ」

７．学生の学び

学生たちは，講座終了当日に大学に戻り，自分たちが実施した講座の振り返りを30分程度行った。この振り返りの主たる目的は，実施できたことや課題を整理し自分たちの活動の意義を確認しながら，次に講座を担当する学生グループに向けた「よかったこと」「改善すべきこと」のアドバイスも兼ねていた。講座の実施に対するグループ評価と自己の学びについては，実習記録でも振り

写真５　中央区職員と大学教員との振り返りの様子

返りを行った。全ての学生が，概ね目標は達成できたと評価していたが，学生らが事前に調べ想定していたよりも，通いの場の参加者は，外出頻度が高く，居住地域の場所はほとんど知っていたことから，目標に挙げた新たな施設や場を伝えることができなかったことや，講座のテーマの絞り込みについて，参加者のニーズの把握が不足していたと評価していた。しかし，新たな場所を知る機会を得て感謝していた参加者や，外出する意義や外出する際の注意情報などを新たに学んでいた参加者がいたこと，お出かけマップを事業スタッフが別の機会で使用させてほしいと言われるなど，今回のミニ講座は意義あるものになっていた。また，学生は，今回の総合実習を通して，PCC 実現のために看護職は，「健康への気づきを促すかかわりがとても大切であること」そのために「看護職による一方的な情報提供ではなく，まず対象のニーズを把握することが大切であること」を改めて学んでいた。

８．中央区と大学との実習後の振り返り（写真５）

全ての実習が終了後し，各学生の実習記録が提出された９月に，中央区職員と担当教員と今回の取り組みについての振り返りの時間を設けた。そこでは，学生にとっては，30分以内での参加型講座の難しさや，集団を対象とする難しさの課題も話し合われた。しかし，フィールド先である「高齢者通いの場」からは「是非，また来てほしい」という参加者やスタッフの声があったことや，お出かけマップといった参加型の楽しい内容であったというポジティブな評価を中央区職員からいただき，今回の取り組みは，学生の学びと市民（参加者とスタッフ）の反応，さらに大学と中央区との連携などを総括すると，有意義な総合実習（基礎看護学）のスタイルが構築できたのではないかと考える。

Ⅲ．おわりに

今回，People-Centered Care を基盤とした学部４年生の総合実習（基礎看護学）において，聖路加国際大学が設置されている自治体との連携，「高齢者通いの場」を運営する市民スタッフと参加者である区民の協力のもと，新たな教育内容を構築することができた。その結果，学生は，地域で暮らす人々の生活や健康ニーズの特徴を知り，PCC の実現に向けた看護職のあり方を考える機会を得ることができた。大学と中央区，さらに区民（市民）との連携による総合実習（基礎看護学）の新たな取り組みは，学生にとっても，参加者（市民）にとっても双方に意義のある取り組みとなり，次年度も，中央区と共に連携して本科目を進めていきたいと考える。

謝　辞

総合実習を進めるにあたり，ご相談から始まり，ご支援・ご協力いただきました中央区高齢者福祉課高齢者活動支援係の職員の皆様に心より感謝申し上げます。また，学生実習を温かく受け入れてくださいました，中央区「高齢者通いの場」のスタッフ，および参加者の皆様に，心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

文　献

１）厚生労働省．地域包括ケアシステム［Internet］．https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu［参照 2018-10-26］
２）中央区．高齢者「通いの場」支援事業［Internet］http://www.city.chuo.lg.jp/smph/kenko/gokoreinokata/ikigai/kayoinoba.html［参照 2018-10-26］
３）髙橋恵子，亀井智子，大森純子ほか．市民と保健医療従事者とパートナーシップに基づく「People-Centered Care」の概念の再構築．聖路加国際大学紀要．2018；4：9-17.
４）Kamei T, Takahashi K, Omori J, et al. Toward advanced nursing practice along with people-centered care partnership model for sustainable universal health coverage and universal access to health. Rev Lat Am Enfermagem. 2017; 25. e2839（10p）.
５）中央区高齢者孤立防止・生きがい推進懇談会報告書．中央区高齢福祉課［Internet］．https://www.city.chuo.lg.jp/kusei/kobetsukeikaku/kobetsukeikaku/koureisha-keikaku.files/houkokusyo.pdf［参照 2018-10-26］